

現代教育科学 no. 632

2009 年 5 月号

pp. 49-52

(本稿の最終原稿は、上記を参照)

## 生徒も教師もコミュニケーション体験

吉田研作(上智大学)

### はじめに

小学校の外国語(英語)活動がいよいよ始まる。学習指導要領によると、その目標は次のようになっている。

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

ここで大切なのは、「知識」として、というよりは言語と文化を「体験」させること。また、「コミュニケーション

能力の素地を養う」ということである。つまり、中学校以降は、外国語(英語)を「教える」ことが前提となるため、「何を教え」、それを「何ができるようになるために」教えるか、という「知識」と「技能」、という明確な目標ができる。つまり、どういう「文法規則」や「語彙」を教えるか、また、これらの言語知識をどこまで、いわゆる四技能と言われる「話し」「聞き」「読み」「書く」ことができるようになれば良いか、ということがはっきりしている。

しかし、小学校の外国語(以後、英語)活動では、そのような言語「知識」も「技能」も、それ自体の修得が目標になってはいけないことをわすれてはならない。あくまでも、英語を使ったコミュニケーションを体験させることにより、言語や文化について幅広い理解を促すことが目標なのである。

### 中学英語の前倒しをしないこと

2011 年度からは、上記の小学校における英語活動が必修になるが、その前に、2009 年度から既に、前倒しで英語活動を取り入れることができるようになっており、英語ノートやそれに付随する CD 等の「教材」も配布される

ことになっている。

そこで、最も大きな問題は、次の点だろう。それは、学習指導要領にもある通り、小学校の英語活動は決して中学校の英語教育の前倒しになってはいけないこと、そして、中学校で英語が嫌いになる生徒の数が非常に多いことを考えると、小学校では、少なくとも「英語嫌い」の前倒しを作ってはならない、ということである。しかし、単なる「好き」「嫌い」の問題だけでもない。国立教育政策研究所の調べによると、英語は、中学 3 年生になると、ほぼ 10 人中 3 人が授業が「分からないことが多い」あるいは「ほとんど分からない」と答えている。これは、他のどの教科よりも高い数値なのである。

中学生がなぜ英語が嫌いになるかについては、文法中心の授業の弊害、英語を知識として詰め込もうとするこの弊害、英語をコミュニケーションの道具として使わせるような活動がないこと、等、色々考えられる。しかし、なぜ、英語が他のどのようかよりも分からない科目になっているのか。それは、英語以外の科目は全て、小学校で、具体的な事例や体験活動等を通して学んでおり、それが「素地」となって中学のより理論的で体系的な「教

科」としての理科、数学、社会、国語へと繋がっているが、英語だけは、小学校では、そのような体験的学習が全くないまま、いきなり、中学で、体系的な構造の学習を強いられているのである。理科の自然観察もなければ、社会の社会科見学もない。算数のような具体的な数を扱うような経験もない。いきなり、数学の方程式や化学方程式のような抽象的で体系的学習から入らなければならないようなものなのである。

つまり、小学校の英語活動は、他の教科と同じような体験的な学習を中心にしなければならないのであり、いきなり、中学でやるような文法や単語の暗記、訳読をしてはならないのである。それをすれば、必ず、英語嫌いの前倒しにもつながり、折角小学校に英語活動を入れた効果はなくなり、むしろ、弊害のみがでてしまうだろう。

### コミュニケーションできたことの喜びを大切に

小学校 1・2 年生ぐらいの子どもが学校で英語をやって、喜び勇んで家に帰り、「おかあさん、今日英語やったよ。すごく楽しかったよ」と報告すると、母親が「そう。よかったわね。で、どういう単語覚えた？ 覚えた単語言ってみて」と子どもに要求することがある。しかし、子ど

もは、何も覚えていない（単語としては）ものだから、だまってしまう。親としては、何かを「覚えて欲しい」と思うのは分かるが、子どもにしてみれば、「ワツネー」(What's your name?がこう聞こえることがままある)と先生が言った時に、「マネスケン」(My name is Ken)と答え、先生がにこにこしながら「ベリグー」(Very good)と褒めてくれた、という体験が大切だということを忘れてはならない。大人だって、韓国語の「カムサハムニダ」と聞いて、正しい発音(カムサハムニダ) また、どこからどこまでが一つの単語か、と聞かれて分かる人は、韓国語を多少なりとも勉強した人だろう(「カムサ」が「感謝」)。しかし、「カムサハムニダ」と言ってお礼を言うことはできる。子どもにしてみれば、先生が英語で言ったことが「分かった」、自分が英語で言ったことが「通じた」という経験を積むことにより、英語でコミュニケーションができたという成就感を味わうことがもっとも大切なのである。

つまり、まず、英語活動はチャンクとしての英語表現をコミュニケーションの手段として体験することが大切なので、いくつ単語を覚えたか、いくつ文法的な規則を理解したかではない、ということを認識することである。

## 文字の有効利用

上記で述べたように、小学校英語活動では、まずは、コミュニケーションに役立つ「チャンク表現」に慣れ親しむことが大事だが、5・6年生、という上級学年からの導入となると、認知的には中学生とさほど変わらない程度にまで発達している。

そこで、小学校英語活動では、文字を体系的に教えることはしないことになっているが、学習指導要領を見ると、次のように書かれている。「アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること」と。

つまり、基本は音声によるコミュニケーションを体験することだが、文字を全く使ってはならない、ということではない。たとえば、犬の絵を使った活動の際に、絵の下に DOG と書いてあることは問題ない。文字を補助にすることで、コミュニケーションの理解が進むことは良いのである。

ただし、文字の提示は、あくまでも単語レベル（特に、名詞、それに、公共施設や店の名前等（Station, Library, School Grocer's, 等）のように、コミュニケーション活動そのものに

役立つものに限られる。また、文字を書くという場合も、自己紹介に必要な名前、都市名、国名等、英語活動に役立つものに限ることが大切である。さもないと、どんどん文字や綴り方、書き方が教えられてしまい、正に中学校以降の英語教育の前倒しになってしまい、英語嫌いを助長する恐れが出てくる。また、小学校で文字の補助的な導入は、文字を体系的に教えるのではなく、その時々のコミュニケーション活動に必要なものを導入することが求められているのである。

#### クラスルーム・イングリッシュの活用

次に、英語活動は、できるだけ英語を使って授業を運営するように努力する必要がある。その際に大切なのが、クラスルーム・イングリッシュである。

英語ノートの指導資料の中には、各レッスン毎にクラスルーム・イングリッシュのリストが載っているので、基本的にはそれが使えるように練習すると良い。しかし、クラスルーム・イングリッシュのより一般的な考え方について知っておく必要があるだろう。

まず、クラスルーム・イングリッシュの簡単な種類分けと例を示そう。

A：授業内容に関する英語

(例、What's this? How do you say ~? How many ~ are there? 等)

B：授業運営に関する英語

(例、Stand up. Sit down. Make a circle. Make pairs. Go to the blackboard. Ask your friend. Let's sing! 等)

C：授業運営に直接関係ない一般的な会話表現

(例、Be quiet, please. What's wrong? Do you have a crayon? How do you feel today? That's good! 等)

クラスルーム・イングリッシュは、上記ように、授業の内容の理解、説明等に使われるもの、授業(活動)運営に関するもの、そして、それ以外に、授業内容や運営と直接関係のない普通の会話表現、がある。そこで、英語に慣れていない先生の場合、特に B の授業運営に関する英語から始めると良い。A の場合、授業の中身がその都度変わるので、少し慣れてからの方が使いやすいだろう。また、C の普通の会話表現も、直ぐには出てこないだろう。しかし、B の表現は、毎授業慣用的に使うので、覚えやすいのである。

最後に、小学校教員としての英語力について、一言だけ触れておこう。小学校英語活動の授業を英語で行う場合、基本的には、中学英語が「使えれば」問題ないだろう。小学校の

教員は、英語を知識として分かっていても、それを使うチャンスがなかった人が多い。だから、中学程度の易しい英語を使う練習をしっかりとすることが必要なのである。

### **参考文献**

国立教育政策研究所(2005)平成 13 年度小中学校教育課程実施状況調査データ分析に関する報告書

吉田研作編著(2008)「21 年度から取り組む小学校英語—全面実施までにこれだけは」教育開発研究所